

石田正治著『愛郷者伊波普猷：戦略としての日琉同祖論』

山中，亜紀
九州大学大学院法学研究院協力研究員

<https://doi.org/10.15017/22993>

出版情報：政治研究. 58, pp.185-187, 2011-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：



石田正治著

『愛郷者伊波普猷―戦略としての日琉同祖論―』

(沖縄タイムス社、二〇一〇年、六四〇頁＋索引一七頁)

沖縄は、薩摩藩の「植民地」時代から在日米軍基地の集中する現在にいたるまで、日本の最底辺におかれ、「孤島苦」を強いられている。この過酷な現実には、沖縄の言論人たちはひとり向き合い、「ヤマトと沖縄」のあるべき関係を模索し続けてきた。著者は、かれらの思索的営為に、日本の近代を照射し、それを問い直す豊かな可能性を見る。前著の大田朝敷に続いて、今回考察の対象となるのは、同じく沖縄を代表する知識人・伊波普猷の思想である。沖縄人としての「種族的自尊心」をもつ愛郷者である伊波は、いかにして日琉同祖論を主張し、日本への同化を説く「愛郷主義のナショナルリズム」へといたったのか。本書は、伊波が執筆した膨大なテキスト

を、「伊波の感情表現ではなく、言説の論理構造に注目」しながら丁寧に通読することで、この問いを解き明かそうとするものである。

本書においては、伊波の思想的発展・深化は三期に区分される。伊波が郷土研究に情熱を注いだ第一期（明治三〇年代半ば～大正半ば）、「啓蒙運動家」として沖縄の現状と格闘した第二期（大正半ば～大正末期）、そして、柳田國男や折口信夫に触発され、「純然たる一学究」に立ち戻った第三期（大正末期～敗戦前）である。この時期区分に沿い、本書は三部構成をとる。以下、各部の概容を示す。

第一部「日琉同祖論と沖縄人の個性」では、伊波の代表作のひとつ『古琉球』を中心とする分析によって、彼の思考の主題が提示される。『おもろそうし』や琉球史上の偉人——向象賢・蔡温・宜湾朝保ら——にかんする研究をおして、伊波が読者に訴えようとしたこと、それは、「ヤマト人の支族である沖縄人は政治的にも文化的にもヤマト人に劣らない資質」を有しているが、「沖縄人はヤマトの支配権力との良好な関係なしには繁栄を続けることはできない」、だからこそ「日本帝国に統合されたいま、薩摩支配下で形成された心性と文化を清算し、沖縄人であることに誇りをもつ日本人」にならねばならない、ということであった。このように、「日琉同祖

を基盤とする同化論」は、沖縄人が自尊心を回復し「個性」を発揮することを可能にする「『唯一の』手段的位置」を占めていたのであり、その意味において「伊波の中で『同化論は』個性論と一体化していた」のである。続く第二部・第三部においては、この「個性論」と「同化論」という主題の変遷が丹念にたどられていくことになる。

第二部「蘇鉄地獄のなかで」における分析の主な対象は、伊波が、沖縄の経済的困窮や自身のキリスト教信仰の変容を経験するなかで執筆した寄稿論文である。伊波はこの時期、河上肇の社会改良論のほか、フロイトのトラウマ論やシュライエルマッハーの環境決定論に親しみ、その思想を「一大転換」させたと言われる。だが、著者によれば「転換」の内容は必ずしも明確ではないという。そこで著者は、第二期に執筆されたテキストを、第一期と細かく比較し、あるいは伊波の教会活動・社会活動に照らしながら読み解くことで、伊波の「同化論」から優生学的議論が払拭されたという「転換」を析出するとともに、一方の「個性論」にかんしては、「神との関係においても帝国との関係においても」、本質において連続性を保っていたことを明らかにする。

第三部「沖縄人の共同体」では、柳田や折口との交流を契機に、学的情熱を取り戻した伊波が世に問うた『琉球古今記』

や『日本文化の南漸』を中心に、考察はすめられる。傾倒する柳田民俗学と、しかしそれとは必ずしも整合しない自論とのほぎまで、伊波による「日琉同祖論の蓋然性を歴史的文化的次元から論証しようする試み」は、ときに牽強附会の様相さえ呈しながら、複雑に積み重ねられていく。著者は、それらひとつひとつを読みほどこしながら、伊波が、最終的には、「大東亜共栄圏の実現」に「同祖である沖縄人」も寄与せねばならない、と主張するに至った過程を明らかにする。

終章「廃墟にたつて」では、伊波が戦後に著したテキストを見ることで、「ナシヨナリズムの言説の装いで語られた(伊波の)日琉同祖論が、愛郷主義の戦略であった」ことが改めて確認される。そのうえで著者は、「同化論」に表出する伊波の思想的限界を指摘するとともに、伊波の「個性論」が秘める「ナシヨナリズムが求める同質性の枠組を、より緩やかな寛大なものにする」可能性を強調するのである。

著者による解説は、伊波の遺したテキストの相関関係や、執筆時の社会的・個人的状況、あるいは伊波が考察の糧にした史料・文献等にも目を配りながら、漸進的にすすんでいく。その必然の結果として、本書は六〇〇頁を超える大部となった。とはいえ著者の企て、すなわち、「説明抜き」の断定や論理の飛躍」が散見される伊波独特の文章の行間を逐一埋めるこ

とによって、彼の思索の全体像を浮かび上がらせるといふ企ては、確かに成功を収めている。本書が二〇一〇年度伊波普猷賞を受賞したことは、そのひとつの証左であろう。

(山中亜紀)